氏　　名　木村雄一（きむら ゆういち）
学位(専攻分野)　博　士（経済学）
学位記番号　経博第214号
学位授与の日付　平成17年3月23日
学位授与の要件　学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻　経済学研究科現代経済学専攻
学位論文題目　1930年代のLSEにおける大陸経済学の受容と展開
——「ロビンズ・サークル」を中心に——

論文調査委員　（主査）教授 八木紀一郎　教授 根井雅弘　教授 小島専孝

論文内容の要旨

20世紀前半のイギリスの経済学を取り扱う経済学史的研究においては，ケインズ革命を中心において，ケンブリッジの経済学者を中心にとりあげることが多い。しかし，この時代のイギリスの経済学のもう一つの意義は，ローザンヌ学派，オーストリア学派，北欧学派などの大陸経済学の理論を取り入れて，現在の標準経済学につながる総合的な経済分析を生みだしたことに求められる。この点では，大陸の経済学と経済学者に意識的に門戸を開いたLSEが重要である。本論文は，この新興の経済学研究拠点を率いたL・ロビンズと彼が集めた俊秀からなるいわゆる「ロビンズ・サークル」の1920—30年代の業績をフォロウし，現代経済学の形成過程を明らかにしようとした研究である。

「序章」では，「ロビンズ・サークル」をケンブリッジと対比しうる独自の学派とみなしうるかという問題が提出され，その解決が論文の本体に託される。

第1章は，経済学が「諸目的と代替的用途をもつ希少な諸手段との間の関係」の科学であるというロビンズの有名な「経済学の定義」の背後にある，人間の選択行動における「主観主義」を掘り下げる。学位請求者は，この選択行動は，現実の市場過程のなかに置かれるならば，動態的な企業者行動の様相をもつとして，ロビンズに続いた「サークル」のメンバーによって，動学的変化や均衡の不確定性がとりあげられ，ヒックスによる一般均衡理論の動学化にまでつながることを論じている。この章は，LSE経済学が，オーストリア学派の主観主義とローザンヌ学派の一般均衡理論の導入によって成り立ったことを示す章でもある。

第2章は，アバ・ラーナーの1930年代前半の外国貿易論を取り上げ，その分析の先駆性を指摘している。ラーナーは，外国貿易の限界条件を見事な幾何学的分析によって探求し，サムエルソンに先駆けて要素価格均等化定理の証明をおこなった。ラーナーは，費用逓減状態についても限界条件の精緻な分析をおこなっているが，それは彼に特有の「経済統制」の実現というビジョンにもとづくものであった。

第3章は，ヤング，ロビンズ，カルドアによって展開されたLSEの企業理論である。そこでは，収穫逓増の問題が取り組まれ，企業の内部経済を重視したロビンズを経て，初期カルドアによって「主観的需要曲線」と企業の「調整能力」を重視した動態的な企業理論に達していたとされる。

第4章は，ハイエクとともにLSEに入ったオーストリア資本理論の変遷を，ハイエクとカルドアの関係に注意を払いながら論じている。カルドアはハイエク・ナイト論争に対してハイエクを擁護したが，その際，「迂回法則」を「投資期間」についての理論とみなすことを拒否し，動態においてはオーストリア資本理論は不適合であるとしていた。その後，カルドアは，ハイエクの「強制貯蓄」概念の批判とあわせてハイエクの景気理論を批判し，ハイエクはそれに対応して彼の景気理論の変更を余儀なくされた。しかし，カルドアはこの修正ハイエク理論（「リカード効果」）にも批判を加え，結局，オーストリア資本理論を葬り去ったのである。

第5章は，効用の個人間比較は不可能であるとしたロビンズの旧厚生経済学への批判が，ラーナー，カルドア，ヒックス

の「補償原理」を経て新厚生経済学を成立させる経緯を追う。レッセフェール的信条を有していたロビンズと比べるならば，厚生問題についてのカルドア，ラーナーの客観主義的な取り扱いは対照的である。

最後に総括として「ロビンズ・サークル」が位置付けられる。ロビンズは（また彼の盟友であったハイエクとともに），たしかに，後続する「サークル」メンバー（カルドア，ラーナー，ヒックスら）に，出発点を与えたが，後続メンバーたちは，ロビンズ（やハイエク）の意図とは異なる方向にビジョンと理論を発展させていったのである。その意味では，LSEの経済学者たちが「学派」ではなく「サークル」にとどまったのである。

論文審査の結果の要旨

本論文は，1930年代のロンドン・スクール・オブ・エコノミックス（LSE）における経済理論の展開を多面的に追うことによって，これまでケインズ革命を中心に語られることが多かった1930年代の経済学史に新しい視角を提供している。

LSEをケンブリッジに対抗しうる新興の経済学研究拠点として整備したライオネル・ロビンズは，希少な手段の合理的選択の科学として経済学を定義したことで知られ，散発的ながらいくつかの研究もある。また，LSEで育ったジョン・ヒックス，ニコラス・カルドアの1940年代以降の経済学における業績はいまなお生きている古典に属している。しかし，1930年代の，彼らが「ロビンズ・サークル」と称せられた時期の著作にまでさかのぼった研究は少なかった。本論文は，ロビンズが設定した方向を，一般均衡理論，効用の個人間比較の否定，主観主義，資本理論などの大陸経済学（ローザンヌ学派，オーストリア学派）の導入・摂取として捉えた上で，ラーナー，カルドア，ヒックスなどの俊秀が自己の立場を確立していく過程を示した詳細な研究である。

ロビンズの経済学の定義は，本論文の第1章で取り上げられているが，本論文は，その背後にあるオーストリア学派由来の主観主義を，A・ヤング，カルドア，ヒックスにまでたどり，不均衡をも蔵した動態的な市場過程に結びつけて論じることによって，その理解を深めている。第5章では，ロビンズの効用の個人間比較の否定の含意を，それと一見矛盾するかに見える「暫定的な功利主義」の承認と合わせて論じ，奥行きのある見方を示している。『経済学の本質と意義』を経済学史に残る著作としたこの2つの主張の検討によって，それらが同義反復にとどまる定義的な命題ではなく，背後に経済的自由主義の信奉者としてのロビンズの実践的な価値判断が存在すること，また現実の経済過程のなかでの経済主体の選択を想定したものであったことが明らかになった。これが本論文の第1の貢献である。

他方で，これは特に，本論文のカルドア論について見られることであるが，「ロビンズ・サークル」の俊秀たちが，ロビンズ（とその盟友であるF・A・ハイエク）の企業論・資本論から出発しながら，その立場から離反していく過程が示されている。具体的にはロビンズの企業論を受けて発展させた不均衡な動態的過程論，ハイエク理論の擁護から決別への過程，ロビンズによる旧厚生経済学の否定を受け継ぎながらも補償原理によって政府介入の擁護の可能性を示したことなどである。カルドアの初期論文を読み抜いて，「ハイエク・ストーリー」（ヒックス）に代わる「カルドア・ストーリー」を提示したこと，これが第2の貢献である。

「カルドア・ストーリー」に並行した探求のドラマとして，いま一つアバ・ラーナーの外国貿易論がとりあげられている。費用逓減の場合も含んで，芸術的な幾何的分析によって限界条件を探求する彼の探求のなかに，学位請求者は，合理的な経済を実現するというラーナー特有の「経済統制」＝機能的社会主義者の思想を読み取っている。

本論文では，ロビンズと並ぶLSEの巨頭であったハイエクについては，カルドアとの対比で論じられているにとどまる。しかし，1935年の『価格と生産』と1939年の『利潤・利子および投資』の差異や，「リカード効果」の議論が，カルドアの批判と関連させながら解明されたことは，これまでのハイエク研究の空隙を埋めるものである。

本論文は，上記に説明したように，LSEの「ロビンズ・サークル」という場のなかで，複数の経済学者を配置して，一般均衡理論，企業理論，オーストリア資本理論，個人主義的効用理論がどのように受容・発展・批判されていったかを検討している。そうしたオムニバス的な構成によって，この時代のそれぞれの経済学者の探求を，ばらばらにとりあげた場合以上の奥行きのある理解が可能になっている。それは，現代経済学の形成の理解にとっても有益である。なぜなら，大陸経済学の種々のアイデアを英米中心の現代経済学のなかに統合することは，個人が単独で一挙におこなえる仕事ではなかったからである。

もちろん本論文に欠陥がないわけではない。第１は，説明的な記述や図が多く，何が核心問題であるのかをしばしば読み取れなくなる部分があることである。また，序章や注などに，必要不可欠とは思えない部分があり煩瑣に思われる。第２は，並行してケンブリッジで起こった「ケインズ革命」のインパクトが，カルドアの利子論に関する個所を除けば論じられていないことである。これは，ロビンズとハイエクの総括的な評価にもかかわるので，その欠落が惜しまれる。

しかし，先にも述べたように，このことも，本論文の総体としての価値を損なうものではない。よって，本論文を学位請求の価値あるものと認める。なお，平成17年２月14日，論文内容とそれに関連した試問を行った結果，合格と認めた。